

『スキヤンダル』の語るもの

——絶対の〈悪〉は在り得たか——

遠藤 祐

1 物語と作者

『スキヤンダル』は、新潮社の〈純文学書下ろし特別作品〉シリーズの一冊として、一九八六(昭61)年三月に刊行された、『侍』に次ぐ遠藤周作の長篇⁽¹⁾である。主人公は、自身老境にはいったことを自覚する、六十五歳になった勝呂^{すくろ}。キリスト者で作家の彼は、「原宿ちかく」のマンション

に三間^{みま}統きの部屋を借りて仕事場にし、この「十年ちかく」そこで代表作「沈黙の声」をはじめ、「荒野にて」「使者」⁽²⁾などを宮々と書き継いできたという。息子たちはすでに自立し、家にあつてはおなじくキリスト者の妻との穏やかな、落ち着いた暮らしの日々が続く、という。そのような主人公の身に起きた、まったく思い掛けないゆきを、勝呂を主な視点人物あるいは物語情況の「映し手」⁽³⁾としてたずねていく『スキヤンダル』は、某出版社の文学賞を受けた勝呂の授賞式の場面からはじまるのだが、対象となった作品、彼自身「やっとなあ小説で、自分の人生と文学とに纏^{まと}まりをつけたことにふかい満足感をおぼえ」と語られ、その「小説の担当者であり協力者でもあった」編集者の栗本も「これまでの先生の円環を完結

した作品ですから」とよろこぶその題名は、残念ながらわからない。というより作者は、あえて示さなかったのに違いない。なぜなら物語の始動の時点では、題の如何にかかわらず、「その小説」で勝呂が作家生活のひとつの頂点に立ったことこそ、大事なことなのだから。そして、まさにそのトキを見澄ましていたかのように、意外なでき事が生じて、物語を『スキヤンダル』の世界へ導くことになるのである。

式場の壇の上の席で、作家仲間の加納のスピーチをききながら、ふと「客席の背後」を見た勝呂の眼に映った光景が、本人はもとより読者の多くを驚かす——栗本の立つ「その横にやはり別の社の女性編集者がいる。名は知らぬがその出版社に行くと言関などでよく会う小柄な娘で小肥^{こぶと}りのえくぼの顔に愛嬌^{あいきょう}があるから記憶している。そして栗本とその若い女性の背後にもうひとつ、顔があった。／勝呂は瞬^{まばた}きををした。それはまぎれもない彼自身の顔だった。その顔はうすら笑いと嘲笑^{ちやうしやう}ともつかぬ嗤^{わら}いをうかべていた。／瞬きを何度もした。栗本と女性編集者との背後には誰もいなかった」(I)。自分の顔、精確には自分とそっくりの「顔」が現われて、悪意をたたえた「嗤^{わら}い」をこちらに投げ掛けるのでは、勝呂がわが眼を疑ったのに無理はない。瞬時にして消えたけれども、そっくりの「顔」は、

行くべきところに行きついた勝呂の「人生と文学」との安定に、大きな動揺をもたらしきつかけとなったはずである。その意味で、『スキヤンダル』は〈終わりの始まり〉を伝える長篇と見なされていい。物語は、このとき勝呂をみつめた「顔」をもつ男の影の正体は何か、また勝呂本人とどのようにかかわるのか——を、以下に具体的に説いていく。こうして勝呂の身の上の上に新たな日々が始まるわけだが、謎解きのプロセスは果たして、みずからの展開に読者をひき込む興味深い語りを、『スキヤンダル』全Ⅹ章に提示しえたか、どうか。

その鍵を握るのは、物語の始動にひと足遅れ、Ⅱ章で勝呂の前に姿を見せる中年の女性、数年前大学教授の夫を交通事故で亡くした未亡人成瀬万里子⁽⁴⁾の存在に、ほかならない。彼女は、例の男の影をよく識っており、それと勝呂とのあいだに介在して、両者をつなぐ役割を果たすとともに、それぞれ作中にひと役買う糸井素子⁽⁴⁾、「S氏の顔」と題して男の肖像画を描いたマゾヒストの画家とも、週に一度勝呂の仕事場の清掃にかよう女子中学生のミツとも、かかわりをもつ。偶然に勝呂にもたらされた『スキヤンダル』のはこび、彼に自己認識の改変を迫るように動いていくその底には、〈蔭の演出者〉として成瀬夫人がいる、との疑いはわたしに濃い。『スキヤンダル』を興味深く読み解く所以を、そこに見いだす読者は、わたしだけではあるまい。

「S氏の顔」を含む絵画展の開かれた「新藝術画廊」近くのコーヒー店で顔を合わせたとき、彼女は「ただ先生には、クリスチャンのせいかな性をいつも罪と結びつけておられることは、なんとなく感じますけど……」と、勝呂の作品の〈弱点〉にさりげなく触れ、刺激された彼の、あなたは性をどう思うのか、との反問に、「こわうございます」「性は当人も気づか

ない、一番の秘密を頭わす気がしまして」と応じているのに、気づく。中年をすぎた、しかも「さっきまでは未知だった」男女がとり交わすにしては、確かに「大胆」にすぎることがらに違いないが、それが話題となるように暗に仕向けたのは、「性をこわがっている」と勝呂を批判した「評論家の本」を、さり気なくテーブルの上に置いた成瀬夫人であった、と見なされよう。そういえば、勝呂が画廊を出ようとしたとき、「コートにスカーフを巻いた年輩の婦人がかるく会釈をして入ってきた」ともあって、彼女はすでにその人物が平常から興味を抱く著名な作家であると知っていたわけ、それを意識すると、コーヒー店での邂逅そのものが、偶然とは思われない。しかも、空席を探して「勝呂の隣の席」に腰を下ろした彼女は、彼に気づいて（いやその振りをして）、自分から「さきほどは」と挨拶をしているのではないか。Ⅱ章の示すそういうなりゆきに、近づく機会をうかがっていたと思われる〈蔭の演出者〉の動きの第一歩が、認められていい。演出が、おのれにひそむ「別の人格」、「醜悪や無に墮ちて死ぬこと」を求める〈悪〉の性向に、勝呂をひき合やすように企てられている次第は、物語のはこび自体が明らかにしてくるはずだ。

勝呂の目に謎めいて映る女性、それゆえに好奇心をかきたてる成瀬万里子こそ、実は意図された主題を生かすために、作者によって物語空間に遣わされた人物なのだと思われる。

『スキヤンダル』初版本の「函の裏表紙に」遠藤周作は、「五年前「侍」を終えた時は、次に自分がこんな小説を書くとは思ってもいなかった。だがその頃から、私は自分が創りあげた文学世界をどうしてもゆさぶりたい衝動にかられたのである。衝動は抑えようとしても抑えきれなかった。／＼けれどもこの作品の重要なテーマの一つは、若い頃リヨンに留学していた

時から既に私の心にひそかにあったのだ。それが三十数年後に面をとってその顔をあらわに見せたのである」との一文を掲げている、という。⁽⁵⁾その「衝動」、リヨン留学時から「ひそかにあった」テーマに是非とも向き合わねばならないとされたものは、何か。それは、「月光のドミナ」の画学生千曲の身に、『留学』第三章「爾も、また」のサド研究家中の「ノートの一節」に、多少とも映しだされる「悪」の影、後者の記述を借りれば「神の善意志はこの地上の自然の法則（悪と破壊）に一致していない」「自然の法則は徳と共に悪徳をもひとしく人間に要求している」というサドの導く「事実」に、ほかならない。

『スキャンダル』着手に先立つ長篇の評論『私の愛した小説』⁽⁷⁾は、遠藤周作における人間存在の「悪」の認識という課題の復活を、明らかに告げている。その「悪、死の本能」の章に、以前から「ひよっとすると「Xを求めぬ」ような悪もあるのではないか、という予感が心のどこかに」あって、それは「歳月と共に次第にふくれあがり、今や老いた私を脅かしている」と書いた彼は、そこに「テレーズ・デスケルー」をめぐる、モーリヤックは「救われる可能性のある罪しか描いておらず、絶対的な悪にふれていない。私が罪という言葉をよく使って悪という言葉避けているのは、罪と悪とはちがうからである」（傍点原文）と、「しかし「テレーズ・デスケルー」でモーリヤックはこの女主人公の罪ではなく、悪のほうにふれてしまった。くりかえすが罪と悪とはちがう」と、そして「アルジュルーズでの彼女の「寝そべる快楽」には罪とはちがった悪の匂いが既に漂っている」と指摘したうえで、「この小説」が現在の自分に提示する「テーマ」に注目して、長篇の評論全体の局を次のように結ぶ——「そのテーマとはこの最後の章にふれた悪の問題である。「侍」を書く前まで、どうにか私

は「すべての道はXに向う」という形で自分の文学に結論を与えたつもりだった。しかし「侍」を書いている途中から、昔から心にひそんでいた不安が次第に私をゆさぶりはじめた。老年になってこのようなゆさぶりを受けるとは思ひもしなかったのだが……」。この一節と『スキャンダル』に關する先の一文とを照合すれば、キリスト教作家勝呂のなりゆきを追う長篇に、遠藤周作が何を目指したかはおのずから明らかとなるだろう。⁽⁸⁾なお引用中の「X」とは、「生であり生命であり、人間をより高く生かすもの——私個人はそれをイエスとよんでいるのだが——」を指す、という遠藤周作のコメントをつけ加えておこう。

それにしても、作者の問題意識は物語のはこびにうまくとけこんで、読者がおのずからそれと気づくように、『スキャンダル』は語られているかどうか。素朴な読み手のひとりとして、意余って言葉足らず、とならなければいいと思う。テレーズの姿をみつめながら、サドやエーリッヒ・フロム、そしてユングの著作に触発されて、人間の「無意識のなかに」ひそむ「Xなど必要ともしない根本否定（悪）」⁽⁹⁾の所在に直面した遠藤周作は、それを『スキャンダル』に具現するために、勝呂と男の影と成瀬夫人との三者のかかわりを物語空間の根底に据え、その周囲に糸井素子とミツ、加納と栗本、行状を嗅ぎまわる週刊誌のルポ・ライター小針義男など、そして「長い歳月のあいだ彼女は夫が小説家であることに馴れてきた。どこまで入っていいか、どこに踏み入ってはならぬ境界があるかを知っていた」という妻を配して、物語情況の進行を促すように工夫したのである。その語りの装置が順調に機能しているか否かは、個々の読者の判断を俟つよりほかはないが、少なくともミステリー風の感觸を物語に与えて、読み手の興味をそそることは、確かだろう。

しかし、〈悪〉の具象化についていえば、それが「無意識」裡に在ることを念頭においた作者の試み、主人公とはまったく別の、独立した「人格」を登場させ、成瀬夫人のなかたちによって双方の接近がはかれるという

装置そのものは、『スキャンダル』の担うべき主題の深刻な相貌を、読者自身に気づかせる力を持ち得ていないのではないか。いまひとつ凄味に欠けている——それが長篇をめぐるわたしの率直な読後感だが、主人公の〈悪〉とのかかわりを、成瀬夫人がそうであったように、勝呂が直接、接が身に見いだすというカタチで語られていたら、印象はもっと違ったものとなったはずだ。のみならず、「根本否定」、「絶対的な悪」の影の向かうところが、新宿歌舞伎町「ゴールデン街」の性風俗店だったり、六本木の「SMホテル」で催された秘密のパーティだったりする〈事実〉は、物語に現実味を帯びさせるための設定であるにせよ、卑俗にすぎず、『スキャンダル』をそれこそ主人公にまつわる「スキャンダル」、すなわち「けがらわしい評判。醜聞」⁽¹⁰⁾を伝える作にしてしまいかねない危うさを含む。本筋に絡んで、ルポ・ライター小針の曝露^{ばくろ}記事を書くための執拗な動きが、勝呂と親しい出版社の社長の手で抑えられてことなきを得る、というなりゆきの語られていることも、その危うさを助長する、といえるだろう。現に小針はⅧ章の終わり近くで、「僕は書きますよ。あなたのスキャンダルを。いいですね」と、勝呂に向かって叫んでいるのである。

というわけで、わたしはこれまで『スキャンダル』にどうにも馴染めなかったのだが、あらためて〈陰の演出者〉と勝呂と男の影の動向に関心を寄せつつ、物語状況をたどり直してみたい。

2 再度の出会い

『スキャンダル』に流れるトキは、ある年の「冬のはじめ、賞をもらった日」「あの日男が出現し」たときにはじまり、次の年の「復活祭のあとの日曜日」の一日——教会でミサに列席した勝呂が、「午後、仕事場に行き」、ミツを探して代々木公園を、地下鉄の表参道駅ちかくの病院をたずね、夜自宅で妻とともに休む(Ⅹ)までの、おおよそ五か月余り、それは、勝呂の六十五年の生涯、授賞式のスピーチで加納が要を得て語る(Ⅰ)ように、また創作するという「難渋な旅をこの十五年間、彼は何回もこの部屋で試みた」(Ⅰ、傍点引用者)⁽¹¹⁾と語り手が告げるように、なかば以上は作家生活に費やされてきた歳月にくらべれば、短い。しかしひとの身に重大なでき事の生じるトキは、短くあるのが普通だろう。思い掛けない事から次々と起こる持続と集中のもたらす緊張感のうえに、ひとつの物語は成り立つ。事からの数が多く、かつそれぞれの内容が複雑であれば、物語はおのずから長くなるはずだ。複雑さが、登場人物の心理の綾に由来する場合は、語り口も微妙になって、なおのこと簡単には終わらないものと思われる。『スキャンダル』の物語もその例^{たし}にもれない。とくに勝呂と成瀬夫人との出会いの場面において、その感が深い。

初対面の席(Ⅱ)でありながら、いささかも動ぜずに性を話題にし、「大胆な大きな眼で彼を見た」年配の女性の「ふしぎな」イメージは、その後も折に触れて勝呂の思いに浮かぶのだが、友達の父親の介護にミツのしよう表参道駅ちかくの病院を訪れた妻のもたらした、週に二度そこで「ヴオランティア」をしているという成瀬夫人の消息が、心をひきつけ、冬の

ある「土曜日の夕暮」勝呂の足をそちらに向かわせることになる。面会の意を告げた彼に、「看護婦はやっと赦免状でも与えるように手をあげてエレベーターの場所を指さし、四階だと答えた。なぜ成瀬夫人を見にきたのかと勝呂はエレベーターを待ちながらさき思いだした外国の短篇をまた心に甦よみがえらせた。たった一度しか会ったことがないが、この女性から興味を感じたのはなぜだろう。鉛筆を買ったあとたずねる気になったのは、妻とは決して話さぬ話題もあの夫人とならできる気がするからだろうか」

(Ⅲ、傍点引用者)との一節があつて、この夕暮、勝呂ははじめから成瀬夫人に会うつもりで街に出たのではなかったとわかるけれども、しかし、病院の玄関で「また」心に浮かぶ「外国のある作家の短篇たんぱん」、良妻に「なぜか疲れをおぼえるように」なり、ふと知り合つた「酒場の女」と関係し、「乱雑そのものの女の部屋に寄ると、なぜか妻のそばでは見いだせなかつた休息感を感じるといふ」中年男の姿を描いた「佳作」のことが、仕事場で、鉛筆を買いに行くとき妻に告げた直後に、「突然」思ひだされたのは、どうしたわけか。やはり意識の底に、「ふしぎな」女性の影がゆらめいたからに違いない。勝呂自身は気づかなかつたそれが、「鉛筆を買つたあと、葉のおちた街路樹にそつて灯あかりのともりはじめた路を歩いているうち、妻が話をしていた病院の前を通りかかつた」とき、意識の表てに浮かびあがつて、成瀬夫人をたずねる気にさせたのである。

そのように、微妙な心理の綾が、人物の具体的な動きをとおして語り継がれていくところに、わたしは『スキャンダル』を読む興味を見いだす。そして病棟の四階に上がった勝呂は、夫人がいると教えられたりハビリテイション室へ行って、子供たちに歩行訓練をさせている成瀬夫人を見いだす。「紺色のスポーツ・ウェアを着た」姿を眼にしてから、着がえた夫人

のおりてくるのを「一階の薬局の前で」待つまでに、勝呂の思いは動く。はじめは「ただ彼女をここからそつと見るだけで帰るのだ」と自分の「心に言いかけた」と、語りは告げている。妻と夫人と「外国の短篇」の主人公と——三者のイメージのあいだに身を置いて、勝呂の「良識」はこれ以上進むなど、自身に警告を発していたのである。ところが、子供たちにせがまれ、自分の創つたお話を語り聞かせる夫人を見つめているうちに、「そう、これは妻の世界であり、妻とそっくりだ」という考えが浮かぶと同時に、その反動として、「しかし、この女性は勝呂の小説について会話をかわしながら、妻が決して触れない性のことまで進んで口にしたのだ」という思いもまた、強く彼をとらえずにはいない。妻へ、そして妻から成瀬夫人へと、勝呂の心の指針は大きく振れるのである。

さらに、入口に立つものは誰かを認めた夫人が、「びっくりしたように話をやめ、自分のスポーツ・ウェアに気づいて、／＼「こんな格好で……」／＼大きな眼に恥ずかしそうな色をうかべて笑つた」ところで、事態は決定的なものとなる。いまの語りの次に、いきなり場面が移つて、「着がえて彼女がおりてくるまで、一階の薬局の前で待つた」との一行がおかれるのは、少くとも勝呂の裡に、どこかへ誘つて話し合う機会をもとうとの意向が固まつたことを物語っている、と思う。いや、夫人の方も暗黙のうちにもその機会を求めていたことは、待っていた勝呂とのやりとりが明らかにしてくれる、——「「どうなさいますか、これから」／＼「帰ります。世話をしなければならぬ旦那さまはいませんけれど」／＼その口調は勝呂が誘ってくれるのを待っているようだった。近くに鶏の手羽料理をたべさせる中国飯店があるのを思ひだした。誘いの言葉は自然に勝呂の口に出た」(傍点引用者)。傍点の語りがおもしろい。前のところで二人とも相手を待

っていることがわかるし、後の個室では、リハビリ室の入口に立ってなかに覗いたときの勝呂の在り様とのあまりにも鮮やかな対照が、読者の眼を奪う。ついでに、看護婦の質問に答えた成瀬夫人のセリフ、「いないのよ、わたくしには、子供が」を、勝呂といっしょに記憶しておこう。

病院訪問のくだりをたどると、物ごとには成るようになる場合があるのだ、との想いが、強くわたしに兆す。ではその結果物語空間にもたらされた、病院に近い「中国飯店」での会食の場面には、いかなる動きが見られるか。

それは、次の一文ではじまる。「中国飯店はまだ時間が早いのに意外に混んでいて、顔みしりのマネージャーが案内してくれた隅の席は妻と二回ほど食事をとったテーブルだった。そして妻がいつも腰かけるおなじ椅子で夫人は勝呂と向かいあった」——店の「意外」な情況のもたらした、〈意外〉ななりゆき、もし店が混んでいなかったら、自由に席をとることができて、妻の座る椅子に成瀬夫人を迎える破目にはならなかったはずである。マネージャーが「隅の席」へ案内したのは、高名な作家夫妻がどこに座ったかを、憶えていたからに違いない。そこで「彼はさっき感じた胸の痛みがまた走るのをおぼえた」という。「さっき」とは、リハビリ室で泣きだした幼い子供を抱きかかえて、お話をはじめた夫人を見て「妻とそっくりだ」と思ったときを指すとみることができ。そのときもいまも勝呂の感じた「胸の痛み」は、妻に対する良心の咎めにほかなるまい。しかも今度は、すぐに、「辛いのはお嫌じゃありませんか」／と彼はその痛みを追いはらうため、たずねた」と語られる、勝呂の反応が興味深い。妻の影から意識的に身をひき離して、眼の前の妻ではない女性に対応すべく、体勢を整えた姿がうかがえるからだ。店の混み具合の〈偶然〉がなりゆき

をそのように導く。それは作者の思う壺であるのだろう。

会食の場面には、どれほどのトキが流れていくのか。全集テキストで四ページにわたるそれは、ゆっくりと中国料理を味わい、会話に興じながら、およそ三時間余りは続いたかと思われるが、その経過の間に、語りは三度成瀬夫人のものの食べ方に触れている点が、眼につく。それだけ勝呂自身が興味をひかれているわけだ。まず、注文した最初の料理「雲白肉」と「魚頭沙鍋」が「運ばれてくると夫人は指と箸とをきれいに使って、気が持たないほどおいしそうに食べた。勝呂は彼女の大きな眼や広い額や食べている時の口の動きを見つめた。これは妻とは、ちがう、何かがあった」（傍点引用者）と語られて、夫人の食べ振りにひかれる勝呂の在り様が表示されている。続いて「二人は食べものの話をし」、勝呂の見つけた香港の魚料理店を夫人も知っているとわかって、「食べものの話」は遠慮の垣根を外して人と人との距離を縮める、という世間のならわしどおり、二人のあいだに〈親密な〉空気が生まれ、話がはずむことになるのである。それにしても、勝呂はなぜ夫人の動きに興味を感じたのだろうか？ 傍点の「妻とはちがう何か」とは、なになのか。「什錦鍋粿」がはこばれてきたときの様子をみてみよう。

「彼女は什錦鍋粿とよぶおこげ料理を長い箸を上手に使って口に入れた。おこげを噛みくだく乾いた音が口のなかでした。その口の動きをじっと見ると、なまなましいほど肉感的なものを感じる。それはなにかエロチックで、今まで妻や他の女性と食事をしたときに決して連想したことのない性的な行為を思わせた。それだけではなく箸を動かす時や盃を口に運ぶ時のながい指の動きには蜘蛛が餌食に糸をまくような滑らかさがある」と、語りの伝える成瀬夫人の在り様、「おこげ料理」はたしかにおいしいが、

それを貪るように口にする彼女の姿は勝呂の心をつかんでやまない——
「実においしそうにお食べになりますな」／と彼は思わず吐息をついた
と告げられるほどに。「肉感的」とも、「エロチック」ともいう、あるいは
「性的な行為」を、「餌食」を糸で絡めて動けなくする「蜘蛛」の魔性を、
連想させるともいう。そこに、勝呂は「妻とはちがう何か」、したがって
「妻に似たこの女性」(Ⅱ)・「妻とそっくりだと(*中略)考えた」(Ⅲ)
という成瀬夫人からは想像もつかぬ、危険な魅惑をたたえた別の女性のイ
メジを、認めるのである。

勝呂の「贗者の肖像画」が話題となったあとに三たび語られる夫人の食
べ振りにも、彼の眼をとおして触れておく、——「夫人は手をのばし、皿
にもられた小蝦を取って食べている。かるくとじた唇の奥で、歯が動いて
いるのがわかる。料理を味わっているその表情をみていると勝呂は何かを
思ひだした。そうだ。それは肉食獣が獲物をたべている時の表情だ。さっ
きまで病院で子供たちにとり囲まれていた夫人が今、まったく違った女に
変わったような気がする」。「肉食獣」はいささかきついが、作家の自然な連
想だから、仕方がない。それよりも問題は、いまの終わりの一行の示す印
象に在る。再度の出会いの勝呂に対してもつ意味は、そこに集約されてい
るはずだ。眼前の夫人が、「さっきまで」とは「まったく違った女」にな
ったように感じられるのは、何故だろうか？——との思い。「別人のよう
すねえ」／と彼はまた吐息をついた」とあって、勝呂がいかに深くそれ
にとらわれたかを、「また」語りは示す。この場面をふり返ると、二人の会
話も結局その秘密をめぐって交わされてきたことが、明らかとなる。

成瀬夫人が勝呂の「今月のS誌の短篇」に触れたのを機に、前回と同様
話が性の問題に及んだときの状況を、みればよい。「真顔になって」・「聞

えないふりをして」・「眼を大胆にみひらいて笑い」と、さまざまに態度を
変化させつつ、相手の「好奇心」をそそっておいて、肝心なところではす
るりと逃げてしまうその在り様は、勝呂に彼女を「謎めいて」見させ、彼
を「更に」ひきつけていくのである。夫人のセリフを二、三掲げておこう
——「でもわたくしが主人と深く結びつけられていたのは性で……いえ、
性にあらわれている二人の心の奥にあるもので……それが一致したのです
わ」、「わたくしは結婚まで、いいえ結婚してしばらくは自分にそんな秘密
が隠れているとは思いませんでした」(傍点原文)、そして「ある事が
あって」「わたくしも知らなかった秘密が目覚めたんです」などなど。そ
う言われると、勝呂でなくても、「ある事」とは何かを知りたくなるだろ
う。あるいは、食べ物や料理店の話から近作の「短篇」に「話題を急に
変えた」のも、前回の例に倣って、そうすればかならず性が問題になっ
て、彼を刺激し、思うように操ることができるといふ計算の上になりたつはこ
びであったか、と思われる。

先に触れた勝呂の嘆声「別人のようすねえ」に、「どんな人間だつて
一つの姿や一つの顔ではありませんもの」と成瀬夫人が応じ、「じゃあな
たは別の姿や別の人格がおありなのですか」「どのような別の人格ですか」
と突っ込む彼を、ちょうど案内されて来た青年を見た夫人が「あら、雪だ
わ」と言っかわす——そのいきさつを伝えたあとで、「どうしても教え
て頂けませんか」と勝呂はしつこく訊ねた。「どうしても」／「いつかね
……いつかお教えしますわ」／と夫人は微笑しながらつぶやいた」と語り
終えられるこの場面に、《蔭の演出者》の巧妙な誘導が、みいだされてよ
い。彼女の《微笑》は、思いどおりにことをはこんだ人間の満足感と余裕
との現われであるだろう。だから「いつか」云々は逃げ口上ではなかった

はずだ。Ⅲ章の終わりのパラグラフ、〈醜行〉をあばくためのネタをつかもうとする小針に強要されて、性のパーティの会場となった六本木のホテル「シャトオ・ルーシュ」に勝呂が同行した次第を伝えるくだりの冒頭に、中国飯店の夜彼が夫人に「手紙でもくださいと冗談めかして頼んだ」ことを告げた語りは、おなじパラグラフの最後で、仕事場へ戻るために乗ったタクシーのなかの彼、まったく期待していなかった無署名の手紙の「封を切った」勝呂の姿を伝えている。「達筆の女文字」でそこに「迷った末、やはりこの手紙を書くことに致しました」と書き記す成瀬夫人は、書くか書かないかではなく、「先生」の「知りたい」ことを、会って話すか手紙に記すかで「迷った」に違いない。

こうして、『スキヤンダル』のⅣ章に、その大半を占める成瀬夫人の長い「秘密の手紙」を、車中の勝呂が開いたおかげで、読者も直接読むことができる。すると読む側のひとりひとりが手紙の受け手の立場に立つことになって、勝呂の在り方に加わる成瀬夫人の重味をも、実感できるのではなからうか。『スキヤンダル』の語りで、登場人物自身がおのれを明かす個所は、この手紙をおいてほかにはない。手紙といえは、「愛読書の一冊、失礼とは存じましたがお送りさせて頂きます」という、やはり成瀬夫人の便りが、Ⅶ章に出てくるが、それは用件を伝える普通の書簡にすぎない。だからⅣの手紙は、他とは異なる語りとして、作中に目立つ。そのようにするのが作者の意図ではなかったか、とわたしは思う。

3 夫人の手紙

「病院で子供たちと遊んでいた時、思いもかけず戸口で先生がのぞいて

いらっしゃるのに気がつき、寝顔を見られたように恥ずかしゅうございましてのに、お食事までお誘いいただいた時は夢心地で、さぞ、あつかましい女と思召おぼしめしたことでございましょう」と、先日の情況に触れた挨拶にはじまる、手紙における成瀬夫人の語りは、テクストで十二ページにわたるほどに長い。しかもⅣ章の記述は「ここまで書いて、わたくしは……」で途切れて、最後のところが伝わらず、読者にもどかしい思いをさせるけれども、手紙のあとにおかれたⅣ章の一段が、「読み終ってからもう三日になる」勝呂の裡に、「まるでスープに入っていた異物のように」ひっかかっていつまでも消えない、その手紙の一節を示してくれている。「そのどちらがわたくしなのかとお訊ねでしようか」「時にはわたくしは自分が無気味に思えます。無気味に感じます」——成瀬夫人の長い語りは、結局それを勝呂に告げるために、費やされた、といっている。ただ、「そのどちら」かとは何を指すかを知るためには、さかのぼって、手紙の文言をたどらなくてはならない。

冒頭の挨拶に続いて、成瀬夫人は手紙を送る「理由」のひとつを、次のように記している——「別の人格ということに異常な興味をお示しになることからして、先生もわたくしと同じように何かをかくしておられるのではないかと思うようになりました」と。その点に注目すると、長文の手紙は、「先生ならばわかつて頂けるのではないか」との期待をこめた自己告白にとどまらず、その〈正体〉をつきとめるために勝呂に向けて放たれた疑惑の矢と化す。勝呂に出会ってから、疑いを抱いたと夫人はいう。そうなのだろうが、しかしそれ以前にこのキリスト者の作家に彼女なりの興味をもち、ひそかに会う機会を求めていたことは、すでにみたとおりである。出合いは彼女に問題点を確認させるきっかけとなったもの、と思われる。

そのあと、「P大学」の経済学部の教授であった亡夫成瀬俊夫との出会いから結婚にいたるまでの経過を伝えるなかで、少女時代に成瀬から聞いた、「心のなかの人形」が夜なかにひとり踊りだし、夢に現われる、という話に衝撃を受けたこと、「学徒出陣」した成瀬が一年半ほどを中国ですごし、見習士官から少尉になって、敗戦の半年後に「復員」したことに言及した成瀬夫人は、「明大前の焼け残った家に、二間をかりて」二人の生活がはじまったところで筆をあらため、「いよいよ本題にふれねばなりません。そんなことまで書くのは慎しみのないことですが、しかしこの間の先生とのお話で結局は避けて通れぬことと思ふようになりました。性はわたくしには恥ずかしいことではございません」と記して、読後火中のこの念を押す。一節は、勝呂にも読者にもおのずから緊張をもたらすはずだ。

結婚には当然のなりゆきとして性生活がともなう。ひとははじめは戸惑うことがあっても、驚いたり怖れたりはいない。成瀬夫人も、「正直いって、こういうことがどうして生の悦びになるのだろうか」と思いつつ、格別異をたてずに、夫に「抱かれ」ていく。だが、彼女は同時に異常な事態をも認めなければならない。自分に近づき身体を求める相手に、夫であつて夫ではないものの影を認めた、ということ。「仰向けあおむけになって見あげる彼の顔はそれまでわたくしのまったく知らない別のものでした」「それは平生の、幾分、柔和だが、こめかみのあたりに神経質な翳かげがあり、笑うと少し子供っぽくなる顔とまったくちがっていました。眼が充血して残酷な色をうかべている顔なのです」と、手紙に告げられるそれ。それを見て、「誰？ あなたは。あなたは誰」と疑問を感じ、「わたくしは不安にかられ——いえ、不安ではなく恐怖に襲われて叫んだことさえあります」と、

夫人はいう。『スキャンダル』の問題の〈発端〉がそこに在ることを、読者は忘れてはなるまい。手紙は「本題」に入ったのである。

「倅しあわせと言えば倅せな生活がつづきました」と手紙にあるけれども、この一文自体が「倅せ」は条件つきであることを示しているよう。いや「倅せ」が感じられるだけに、かえって、夫の浮かべる見知らぬ「顔」への疑問の念は強まったに違いない。しかし、やがて事の次第が明らかになるトキがやってくる。夫人が夫の黙して語らなかつた、戦争下の中国における行状を知るきっかけとなったのは、東京のステーションホテルで「下賞」の授賞式とパーティのおこなわれた日のでき事であった、という。学術賞を受賞した成瀬とともに臨んだパーティ会場でのそれ。「軍隊当時の川崎」と名乗る人物の出現、その名を聞いた夫の顔に兆した「一瞬」の「硬直」、ひと目を避けるような二人の動きなどが、さらなる不審を呼びました、という。ちなみに、このとき友人加納が文学賞を受けたので会に出席していた勝呂の姿を夫人は「はじめて」「拝見した」と、ふとひとこと記されているのが、興味深い。人間の奥底にひそむ〈別の人格〉の発動の問題への具体的な接近と、勝呂への接近との第一歩は、物語のはこびにおいて同時に踏みだされたのである。

パーティからの帰宅後、川崎とは誰かを訊ねたとき、夫の顔が「ふたたび、かすかに硬直し」たのを見て、さらに「疑惑」を深め、以後二人の關係に注意を向けるにいたつた成瀬夫人の動向に触れたあと、手紙は、ある「土曜日」のでき事を伝えて、問題の核心に迫っていく。その日の午後にかかつてきた川崎からの電話で、話が中国の農村で起きた事件にかかわる「慰霊の会の金」のことであると知つた夫人は、おなじ日の夜、「慰霊の会」で随分お金がかかるのね」といかにもさり気なく夫にきいて、中国で

何があったかを彼からひき出すとともに、自身も思い掛けない体験をした、という。事件とは、スパイが隠れているとされた中国の村を襲い、「女も子供も」含めて村びとたち全員を虐殺した、と明かされる眼の前の人物の行状そのものを、指す。しかも、二度くり返したそれを想起する「成瀬の顔」に、「新婚当時、髪をつかまれ押し倒された時に見あげた、もうひとつの夫の顔」の認められた点が、注目されている。その〈顔〉こそ、夫にひそむ嗜虐性の〈別の人格〉が抱く歪んだ欲望の具現、「醜悪や無」などの負の領域への下降を目指す〈悪〉の影なのだろう。そういう恐るべきものが裡に存在し、意識を超えて勝手に動くことを知ったら、誰でも自分は何ものかと不思議に思うに違いない。「その夜」の成瀬夫人はまさにこの不思議を体験したのであった。

夫ならぬ夫の声は、それまでと違って不審を感じさせない。むしろ彼とともに「女や子供たち」が閉じ込められた農家の燃えあがる音を、空襲のときの「列車が走るようなあの音」の記憶に重ね合わせて「聴いて」いるうちに、「突然、わたくしはしびれるような感覚に捉えられました」と、「この夫のなかに、そうした別の男の影が存在していたこと、そしてその矛盾した二つのものが自分の夫をつくりあげていたことをはじめ知って、わたくしは衝撃と共に快感さえ味わったのです」（傍点ともに引用者）と、夫人は手紙に書く。夫をめぐる不審な事態が何ごとであったかを理會した瞬間、それは同時に、「夫のなか」の「別な男の影」の動きに呼応する、彼女自身の裡なる〈別の人格〉が眼覚めた瞬間でもあった。だからこそ、「しびれるような感覚」が兆し、「衝撃」と「快感」とが訪れたのではなかったか。「その夜」夫人は、はげしい性の衝動に身をゆだねて、「どのように燃やしたの」「声は聞えたか」「女たちは射たれた時、どうしたの」

と、次々と叫びながら、積極的に夫を求めた、という。いままでまったく知らなかったへもう一人の自分・やはり嗜虐性の〈別の人格〉が、相手のそれに呼応して表てに現われる——身近な二人のあいだにそういうなりゆきのもたらされるところに、眼を留めておきたい。もし成瀬夫人が夫以外の人間に、秘められた影の呼応を求めるとしたら、どうしてもその人物に接近することが必要となるのだから。

「その夜」がいつであったかは、特定できない。ただ、夫人が「先生を拜見した」というパーティの夜からはさほど遠くないときであること、しかし物語のはじまりの時点、勝呂の文学賞受賞の日よりはるか以前の「土曜日」であることは、手紙の叙述から推察されよう。すると、勝呂の顔をはじめ見て観てから、会って話をするまでに、彼の著作に接する時間はたつぷりあったわけだ。成瀬は学生時代に尊敬するY先生が舎監となっていた「基督教の学生寮」に入って、「一時は（*中略）洗礼を受けようか」と考えたこともある、という人物で、その彼におよそ矛盾した〈人格〉を認め、た事實は、近くで顔をみただばかりの高名なキリスト教徒作家への興味を、成瀬夫人の裡に培ったに違いない。夫との刺激的な夜の「秘密」を、夫の死後のヴォランティアとしての活動を、被虐症の女性糸井素子との関係を告げる手紙は、勝呂については何も語らないけれども、少なくともあの「土曜日」の体験以後、彼女が勝呂の小説やエッセイを熱心に読むようになったことは、充分に想像しようところであろう。そういう夫人は、夫のもたらした残酷な情景に嗜虐的な衝動を抱く〈自身〉に「嫌悪感を感じたこと」はないといい、「わたくしは、この衝動がいったい心の奥のどこから来ているのか、知りたい」としたうえで、ふたつのおのれの、「その矛盾を考えると、時には自分が無気味に思えます」と記す。さもあらうと思

うけれども、ここまでたどってくれば、読むものにも、「無気味に思えるゆえに成瀬夫人が気になる存在になっていく。Ⅳ章の最後にいまの一行が先にみたとおり「スープに入っていた異物のように舌にひっかかって」とあって、事態は勝呂にとってもおなじであったことは、明らかだ。

それにしても夫人の手紙が、「ここまで書いて、わたくしは……」で切れているのは、どうしたことか。書くべきことは一応書いて、さらに何かをつけ足そうとして思いとどまった様子がかげえるのだが、いったい何を伝えたかったのだろう。わが身の抱える大きな「矛盾」と、その「無気味」な感触とを告げて、でも「どうにもなりません」と締め括る言葉に注意すると、先にみた冒頭に近い一文がおのずからわたしの想いに浮かぶ。いま一度確認しておこう——「別の人格ということに異常な興味をお示しになることからして、先生もわたくしと同じように何かをかくしておられるのではないかと思うようになりました。「ここまで」相手の要求に応じて自己の秘密を「書いて」きた夫人は、その疑惑の矢を標的に射当てて、勝呂の秘密をつきとめることを、あらためて求めようとしたのではなかったか。しかし、それは不躰けだとする〈常識〉も働いて、さんざん迷ったあげく、そこまでは書かずに投函したもの、と思われる。

こうして夫人の手紙は終わるのだが、はたしてそれは勝呂の胸をはっしと射ることになったのである。わが家で「結婚記念日」の晩餐の卓についても、「読み終ってからもう三日になるが、まだ驚きと日ごとに増している好奇心が胸に渦まいている」という。手紙の繋いだ二人のあいだは、以後どうなったか。

4 間奏曲

勝呂はⅤ章のはじめで、妻とともに、島原半島をめぐる、長崎を経て、「ドロ神父」の由縁ゆかりの地外海そとめにいたる二泊三日の旅行に、出かけている。

三日目の日曜日に町の「背後の丘にある煉瓦づくりの教会」¹⁴のミサへの列席で終わるその旅は、彼にとっては「この冬から襲ってきたいくつかの出来事」のもたらした「不安」、「心の怯え」から逃れるための、「成瀬夫人や糸井素子の世界から逃れるための旅」を意味していた、という。裏返せば、「妻との旅行は生きるための旅」であり、妻とともに「二人で静かな土地で何日間かを過す」ことを、勝呂は求めたのである。すると読者はそこに、心理学者東野の言葉を借りれば「人生に建設的な統一や調和を好む」「バイフォリア型」の人間、生を光明を安らぎを求める勝呂の姿を、明らかに認めることができよう。にもかかわらず彼の裡に、他者虐待もしくは自己破壊に向かう暗い衝動を現出する「成瀬夫人や糸井素子の世界」に、それを示唆する成瀬夫人そのものに対する〈好奇心〉は、根強く動く。だからこそ旅に出る前にふと心に浮かんだ「神曲」の冒頭、すなわち《地獄篇第一歌》のはじまりの句が、ミサの席で神父について《山上の説教》の一節を唱える勝呂の心に、「われ人生の半ばにして……道を失い……暗き林に迷い……」と、通奏低音のように響くのである。

というわけで、Ⅵの旅行は物語のはこびのうえに、勝呂の二つの側面、というより二人の勝呂の存在を明確にする役割をはたす、とみることができる——妻とともに生きるキリスト教徒の彼と、手紙の一節に「素子は形をかえてですが、夫が教えてくれたあの快楽と同じものを別の形でわたく

しに味わわせてくれました。彼女も烈しい陶醉の最中、このまま死にたいと叫びます。死になさいとわたくしは申します。先生、人間は愛や美しいものために死にますが、でも醜悪や無に墮ちて死ぬことだってできるのですわ」と示される成瀬夫人の在り様にひかれる彼と。勝呂自身はあとの自分を、人間のすべてに興味をもつ作家根性の表われと意識するけれども、それだけではあるまい。

「時には自分が無気味に思えます。無気味に感じます」という手紙の言葉が気になって仕方のない勝呂は、やがて深更「午前二時」、昔風にいえば「丑三つ刻」に、「くりかえし、しつこく鳴りつづけ」る電話の音で眼を覚ます。その状況を告げるV章冒頭の次の一節が注意されている——

「勝呂は黙って電話の音を聞いていた。妻も不安そうに闇のなかで耳をそばだてているようだ。音は心の底の呻きのようにさえ思えた。心の底で口をあけている深い穴。その穴を吹く風のひびき。彼が小説のなかでまだ書かなかったもの……」。そこで勝呂は、他人もしくは人間一般ではなく、まさにおのれ自身の「心の底」をみつめ、ぼっかりと開いた「穴」を見だしている。「穴」の奥は、寝室のそれにまして濃い闇だろう。このとき、「わたくしを何処に連れていくのでしょうか。わたくしの常識も理性も抑えられぬこの心の奥の真黒なものは……」という成瀬夫人の手紙の一節が思い浮かべられていたとしても、不思議ではない。「呻き」とも「風のひびき」とも聞かれる電話の音に、勝呂は、「穴」の闇から自分に向けて発せられたサインを読み取ったのだ、思われる。それこそ「彼が小説のなかでまだ書かなかったもの」があるというその何ものかからの発信であって、もし受話器をとれば、メッセージが聞けたのかもしれないが、彼は、不安そうな傍らの妻に「放つときなさい」といって取り合わない。代わりに、

まもなく催された出版社主催の月例小講演会の壇上で、ふたたび現われたあの「勝呂とそっくりの顔」をした男の影から、それを直接に聞かされるのである。

小講演会の講師は、心理学者の東野と勝呂の二人。会の案内の葉書を「無記名で病院宛に送っていた」勝呂にこの日、成瀬夫人の存在を気にする姿勢が眼につく。講演前東野と人間の心的傾向について話し合うのも、「成瀬夫人が我ながら無気味だと告白した彼女の矛盾している心」を思い浮かべてのことだし、先に壇に上がっておのれの「文学」について話したあとも、聴衆のなかに「成瀬夫人の姿を探しはじめ」るのだ。すると、彼のその「期待」に応えるかのように、夫人に代わって、例の男の顔が現われた、という。話を続けながら、会場の出入口の方を見た勝呂は「突然、烈しく瞬」く。なぜか。「彼がいた」からだ。「勝呂とそっくりの顔が出入口近くで蔑みの笑いをうかべ、こちらを見ていた」からだ。そのなりゆきがわたしには興味深い。なぜか。会場のどこかに成瀬夫人のいたことはあとで明らかとなるが、その夫人を媒介にして、他の聴衆の誰も気づかぬ「そっくりの顔」が出現するとみられるからだ。「あの授賞式の夜とまったく同じだった」と、語りはいう。しかしあの夜には成瀬夫人はその場にいなかったのではないか。いや、いたのだ、とわたしは思う。先に触れたように、「土曜日」の夜の夫との体験をきっかけとして、勝呂の在り方に関心をもち、ずっと著作を読み続けてきた、しかも「シムノンなど仏蘭西の推理小説の下訳」をして、出版社と無縁ではなかった夫人が、授賞式の会場にいたとしても、おかしくはない。そして何よりも、彼女は糸井素子の描いた「S氏の顔」を覗いていたことを思い合わせるなら、勝呂はまだその存在を知らなくても、勝呂本人と「S氏」とのあいだに立って双方をひ

き合わず役割を、彼女に擬することは、可能だろう。そういう点も含めて、Iの「夜」とこの日とのふたつの情況は、「まったく同じだった」のではなからうか。

しかしまた違いもあって、今回は「瞬きをしても男は授賞式の時にように消えなかった。うすら嗤い。こちらを嘲けるうすら嗤い。みだらな嗤い、そう、あの展覧会の肖像画の表情をしている」と、男の凝視と嗤笑が続き、それが勝呂の神経を圧迫し、「悪寒」を感じさせ、精神のリズムを狂わせていく。人間の犯す罪は「救いのために意味がある」という主題を、どう展開するかがわからなくなり、混乱した勝呂に向かって、男は追討ちをかけるように、嗤いとともに（嘘をついているな、お前は……）、（お前は人間のおぞましいものを直視などしているものか。読者がお前に抱いているイメージを損ねぬように小心翼翼と書いてきたじゃないか）、（なるほど、お前はいつかは救われるような罪は書いた。お前の好きな基督教作家たちがそうしたように。しかし、もうひとつの世界は避けて書こうとはしなかった……）と、辛辣な囁きをかさね、それは（悪だよ。罪と悪とはちがう。その悪だよ）との指摘を残して、消えたという。語るべき言葉を失って立ち往生した勝呂を、司会者が扶けて控室に連れていく。そこで休息して落ち着いた勝呂は、あれは「幻覚」であり「幻聴」なのだ、と自身に言い聞かす。それで「納得しようと思った」わけだが、しかし、へしようと思つたのと、実際にそうへしたのと、おなじではない点に、注意する必要があるだろう。彼をめぐる「奇怪で非合理的な現象」はなお、その度を強めて、成瀬夫人の動きとともに、近づいてくるのである。

ちなみに、控室で勝呂は「どうして壇上からあんなに遠く離れて腰かけている彼の嗤いまで見えたのだろうか」と、不思議に思うのだが、おなじこ

とは「自分は考えもしなかったその言葉」を伝えた（声）についても、言えるだろう。「あんなに遠く離れ」た場所から、囁くようなその（声）は、確実に、真直ぐに、彼の耳にだけ届いたのである。もしも先日の深夜に受話器をとっていたら、そうなったであろうように。

「真夜中」の電話と講演会のなりゆきを伝えるVの各段に、成瀬夫人のことは何も触れられていない。消息がわかるのは、勝呂が仕事場へ戻ってからだ。電話で「成瀬でございます。さっき御講演にうかがっております。途中で気分が悪くなった御様子でしたので……」と、自分が会場にいたことを明らかにした夫人は、いまは原宿の駅にいて、病院で「世話している子供」が心臓手術のための予備検査を受けるので、これからそちらへ向かうところだ、という。しかしすぐに会って話をしたいと勝呂が申し入れても、「検査があと三十分で始まるのです。茂ちゃんに——その子供の名ですけど——必ず行くって約束しましたから」と、自分の事情だけを説明して、電話を切ってしまう。なるほど、子供のことが心配で、気が「急いでいた」に違いない。それにしても、勝呂の変調を眼にして、どうしたろうと思つて電話をかけたくらいだから、少しでも相手の言葉に耳を貸す姿勢が示されてもよかつたはずなのに。成瀬夫人の「頭」にはいま、病児のことだけが在って、勝呂とのかかわりを考える余地はまったくない。電話の向こうに、いままでとは違った夫人の存在を感じた勝呂は、相手の「秘密」を「暗部」をうかがう好奇心を抑え、黙って引きさがることを余儀なくされるのである。

講演会の折にとどまらず、妻との二泊三日の旅行を終えて帰京してから、事態に変わりはない。「三日」離れただけで長く「留守にした」と感じられる仕事場、すなわち自分の（居場所）に戻ったとき、テレビのニュー

スで糸井素子の「自殺」を知った勝呂は、すぐ病院に問い合わせ、「翌日の十一時ごろ」成瀬夫人に会いに行く。だが、その日には茂少年の手術があるのを看護婦に教えられていたにもかかわらず、成瀬夫人の在り方をそれと結びつけて受け留めようとしないうちに、彼自身の配慮の足りなさが指摘されても、已むを得まい。「手術室のある階」の椅子に、茂の母親といっしょに待機する夫人の想いは、ひたすら茂のうえに向かい、おのずから他を寄せつけぬきびしさを漂わす。おそらく手術の無事の終了を、茂の生命の救われることを願う、眼をとじて唇を動かす〈祈り〉の姿勢は、勝呂を驚かすとともに、素子の死を話題にすることを許さない。黙って二人の女性のわきに腰かけた勝呂も、彼女たちとひとしく「その手術室の赤ランプだけが生きていて、廊下も静寂に包まれている」情景のなかに呑みこまれてしまう〈少時〉をもつ。

やがて「帰ります」／＼と彼がそつと椅子から立ちあがると夫人はまぶたを開き、かすかにうなずいただけだった」と終わるこの舞台上に物語は、Ⅱ・Ⅲ章で勝呂の前に現われた女性と鮮やかに対照する夫人像、病むもの、弱きもの、疲れたものに介助の手をさしのべる「母性愛」に満ちた姿に、照明を当てている。Ⅵの終わりの一段をつけ加えてもよい。そこに、糸井素子を介して「マダム・エヌ」の存在を知って、成瀬夫人に面談しようと病院におもむいた小針義雄の醜い思わくとはおよそかけ離れた夫人のイメージが、提示されている。ナース・ステーションの前で「あの女性」の姿を見かけた小針は、彼女の入った病室の戸口に近づくが……、なかから聞こえてきた「童話を語りきかせている彼女の声」と「時々、質問したり促したりする子供の甘えた言葉」に、「拍子ぬけた気持」になったという。物語は、そんな週刊誌のルポライターなどは見棄てて、母と子にまがう二

人の声を伝えることにつとめ、Ⅶ章を終えるのである。手術が成功して元気を回復した茂の姿に、自身の喜びと伴せのすべてを見いだす成瀬夫人の在り様を、読者はそこに求めることができるはずだ。

講演会の日から茂の病室に楽しい声はひびく「午後」まで、Ⅴ・Ⅵ章に経過する時日は、精確には測れないけれども、それほど長くはあるまい。予備検査と手術の施行とのあいだに旅行があつて、最後の場面は手術の二、三日後というところか。すると十日ほどとなるが、その間、手紙での告白とは裏腹に、〈母〉の優しさを生きる自分に徹して、いささかの揺れもみせない成瀬夫人に対して、勝呂の方は旅行中も帰ってからも、「人生の半ば」どころか、晩年にいたって「道を失い」「暗き林に迷い」つつあるわが身を、想わずにはいられない。物語は、手術の日がすぎたあとの霧深い夜、仕事場でのうたたねの間に、どこか「上」から射しこむ「柔らかな光」に包まれて、〈永遠の休息〉にあずかる自身を、夢に見たにもかかわらず、眼覚めてから、「今まで築いた世界にしがみつこうとする自分をゆさぶり、引き離そうとする手」があつて、「俺を考えもしなかった悪夢のような世界に放りこもうとしている」と感じ、「行くべき方向も帰るべき道すじも今はさっぱりわからなくなった」と思う、勝呂の姿をⅥに示す。

こうして、手紙の繋いだはずの成瀬夫人と勝呂とのあいだは、いったん途切れたまま、「三月」に入ったところで、思いがけず妻の口から成瀬夫人の消息が、手術の成功で「とても悦んで」いると伝えられて、「勝呂は彼女と会うのを期待する感情をいつの間にか持っている自分に気づいて、はっとした」とも、「自分が夫人からの連絡をひそかに待っていることに気づいていた」とも、Ⅶ章はじめに物語は告げている。そこに切れていた繋がり修復される糸口があつたわけで、夫人の方も関心を放棄したの

ではなかったことを、次のはこびが明らかにしてくれる。かえりみて、講演会の場面に夫人への言及が一字一句もみられないのは、勝呂と男の影とのなかたちとなるその姿を会場に認めた物語の、続く〈母性〉に徹した彼女の提示を考慮した、意識的な沈黙の結果であったのだ、とあらためて思う。

5 「水曜日」

「もう三月なのにまだ新芽も固い庭の樹木をながめ」た勝呂の心の動きを察知したかのように、無記名の小包が送られてくる。同封された成瀬夫人の書状にいわく、「愛読書の一冊、失礼とは存じましたがお送りさせていただきます。この本が今は手に入りませんので、わたくしの蔵書でおゆるしてくださいませ。それから今度の水曜日に表参道に重よしという店がございますので六時にお出まし頂きますでしょうか。この間、御馳走になりましたほんのささやかな御礼でございます」と。そして「ちよっとおいしい店でございます。是非、お越しく下さいませ」と結ばれたその文面に接して、夫人を避けるか、近づくかに揺れていた勝呂は、たちまち「好奇心」に制せられた、と語りは言う。送られた書籍は「幼児虐殺で有名な中世の軍人」シル・ド・レの伝記、「一方では神を讃える教会を建て、神父たちに敬意を払いながら、シル・ド・レは自分の城にあまたの子供たちを引き入れ、次々に殺していった」と説明されれば、これを送って寄越した成瀬夫人のつもりは、読者の眼に明らかだろう。愛読書と記され、ところどころに赤丸のつけられたこの本で、夫人はおのれを主人公に重ね合わせているはずだ。伝記は、手紙に次ぐ、勝呂の秘密を衝くための二の矢にはかならない。

先の手紙にあったのとおなじ趣旨の、欄外の書き込みが、二日かかって伝記を「読了した」勝呂の眼を確実にとらえるのである——「激情はどうして起きるのでしょうか。激情はどうしてあれほどの快感を味わわせるのでしょうか。わたくしは道徳では抑えきれぬ、説明できぬ、すさまじい力がかくれているような気がして……」。

では約束の日の情況はどうか。まず、それを伝える一段が「水曜日、指定された夕方に勝呂は重よしの硝子戸をあけた」とはじまる点に、注意したい。冒頭にボンと曜日だけを提示して語りだす、というこれまでには見られなかった語り口によって、物語は、この「水曜日」のでき事がみずからのはこびに軽からぬ役割を担うことを、読者に知らせているとみられるからだ。和食の店重よしでは、二人のあいだに勝呂の投じた糸井素子の「自殺」をめぐる話が交わされるけれども、主導権を成瀬夫人が握って、自分が素子の死への願望成就にいかにかかわったかを、語り進めていくところが興味深い。ただそのセリフのなかに、「本に同封したお手紙にも書いたでしょう。心には理屈をこえた力があり、それは激情になったり背徳に変わるって」とある言葉が、わたしには解せない。「激情」をめぐる覚え書きは、手紙でなく、本への書き込みであったはずだ。夫人にしては珍しい勘違いなのだろうが、それだけ書き込みと勝呂とを結びつける思いが強かったものと思われる。

それにしても、この夜の成瀬夫人には、茂の手術前後の彼女と打って変わって、勝呂に積極的に働きかける姿勢が目立つ。運ばれた料理を愉しげに味わいながら、「平然と」素子とのかかわりを語り、医者にとめられていると酒を辞退する勝呂に、「お書きになっているものと同じようにやっぱり臆病な方ね」と「挑むような言いかた」で飲むことを求め、素子の自

死を想像しつつ「激情」に駆られた自分の姿を、明かす——夫人のその
〈物語〉は勝呂の神経を重く刺激して、それは「彼が今日まで書いてきた
罪の話ではなく、悪の話」にはかならず^お旨を実感させた、という。その重
みに疲れを覚え、たじろぐ様子をみせた彼を、しかし夫人は簡単に解放し
はしない。すかさず素子から形見に「S氏の顔」をもらったことを告げ、
あれは自分ではないという勝呂に向かって、「先生の贗者の^{にせもの}」とうなずい
てから、おどろくべきセリフを口にするのである——「贗者にお会いにな
りたいでしょうね?」。これは物語のなりゆきに決定的な響きをもつ言葉
だ。そう言われて、勝呂がひき退がるとは思えない。さらに夫人は、何を
している男かとの問いに対して、「直接、本人にお聞きになるとおよろし
いわ。先生はいつも話だけをお聞きになって、決して御自分で行動なさら
ないから。お酒も召しあがらない人。最後の最後までお書きにならない人。
傷つかない人……逃げる人」と、追討ちをかけて、挑発の姿勢を崩さない。
そういう次第で、「贗者」に会うべき日時と場所が決まり、勝呂は、夫
人の誘導によって、のっぴきならぬ方向へおのれを進めていくことになる。
卓上のコースターに彼女の書いた地図の示すその場所で何が起きたかは、
次章後半に詳しく伝えられるので、ここではⅧの最後の会話が告げるその
日の日付けに注目しておきたい。それを基準に、読者は「三月」に入った
Ⅶ章のでき事、さらにⅧ章のそのトキを、ほぼ確認できるはずである。
「じゃ、来週の金曜日」「来週の金曜日といえは十三日ですか」とあって、
約束の日は三月十三日、重よしの会食は三月四日水曜日の夜であることが、
明らかだ。すると、シル・ド・レの伝記を「二日かかって」読んだという
から、届いたのは三月二日で、妻から「そうそう、はじめて成瀬さんと話
をしました」と聞いたのは三月一日とみられよう。あるいはいちにちずれ

て、二日の可能性もなくはない。ついでにⅧ章の時日の経過をも、おさえ
ておく。前半の加納の急逝を知らされるくたりは、成瀬夫人との約束の日
が「あと三日に迫っている」とはじまるので、三月一日、加納宅へ向か
う勝呂の「まぶたには五日前」ペンクラブの理事会で会った加納の姿が浮
かぶゆえ、冒頭の一段は三月の五日、そして亡友の告別式からの帰り、タ
クシーのなかで「代々木と達筆ではっきり書いてある」例の「コースター
の切れ端」をとり出した彼が、「明日は夫人が教えてくれた金曜日である」
と確認する三月十二日を経て、約束の日を迎えた後半の六段にいたるので
ある。その十三日の金曜日〈が「イエスの死んだ日」とされているのを
知っている成瀬夫人の指定は、偶然なのか故意なのか、あとで問題にな
るはずだ。

ところで、糸井素子をめぐる夫人の〈物語〉に触れて、わたしにはどう
しても気になることがある。彼女が素子の死への下降のなりゆきを興味を
もってみつめたトキは、茂の手術施行の時点と重なっていた——というこ
と。重よしでのそのセリフをみてみよう。人間を自己破壊にいざなう「烈
しい力」の働き、「素子のなかにそれを……見てみたかった」という成瀬
夫人は、「先生にお電話した三日前の夜」素子と死をめぐるいろいろな話
を、電話でしたこと、「あの子」が「翌日の夕方」に死ぬと予告して電話
は切れたことを、勝呂に語っている。「先生にお電話した」とは、手術の
あった日の霧のふかい夜、仕事場にかかってきたが、勝呂は出なかった電
話を、指す。するとその「三日前」、すなわち彼と妻が旅行に出た日に、
自殺が告げられ、旅の二日目長崎に泊まったときに、素子は「新宿区」の
アパートの自室で縊死していたことが確かめられよう。

夫人はさらに、「もっともその日の夕方、わたくしは彼女の下宿のすぐ

近くまで行きました」とつけ加え、「どうして」と問われて、次のように
説く——「誘惑に勝てなかったからですわ。もうしばらくして素子が死ぬ、
それがわかっているだけにそばに行つてじっと味わいたかったです。彼
女の下宿のそばの小さな喫茶店で紅茶茶碗ちやわんを前にして、わたくし二時間ほ
どいたかしら、（*中略）わたくしは何度も腕時計に眼をやり、もう四時、
もう四時半、もう五時……あの子は今やっている、今やっていると想像し
ました。その時、炎に包まれた小屋がまぶたの裏に久しぶりにあらわれま
した。女や子供たちの声が聞えます。煙やこげる臭においもはっきりと感じま
す。気がついたらあたりは夜に変わっていて……立ちあがって喫茶店を出ま
した」。そこに明かされた「わたくし」の姿は、手術の日の病院に見られ
た成瀬夫人のそれと、何と違っていることか。いや違うという以上に、嗜
虐の悦楽に陶醉を覚える女性と、幼い子供の命が守られるようにと何かに
祈る女性とは、まったく別の人格としか思われぬ。素子の死んだ次の日、
テレビのニュースでそれを知った勝呂が、その翌日病院の廊下に「疲れき
った顔をした成瀬夫人」を見いだすのだから、二個の矛盾した人格がそれ
ぞれ、一日を距てただけで彼女のすべてを動かすさまを、見て取れよう。
いやもっと驚かされるのは、「一人の弱い子供に母性愛をそそぐ」女性の
前で、言いたいこともさし控えて、病院から帰るのを余儀なくされた勝呂
のところ、おなじ日の夜夫人が電話をしたという事実にはかならない。
おそらく素子との関係を告げようとした人物が、昼間の夫人ではなく、二
日前喫茶店で素子の最後のなりゆきの想像に我を忘れた「わたくし」だっ
たことは、明らかだろう。

先にわたしは、V・VIの二章に示された成瀬夫人のイメージを、語りに即
してつぶさにたどってみた。しかしそのどこにも、重よしで夫人が明かし

た事態をおわす標識しるしの観られなかったことを、ここにあらためて思いだ
す。講演会が終わったあと、電話の向こうにいた、あるいは手術の経過を
待って病院の廊下にいた夫人、小さな命のためにおのれのすべてを捧げて
他をかえりみない女性の姿に接していたそのときに、実は糸井素子にかか
わる動きの在ったことを知って、何か裏切られた想いがするのは、わたし
一人だろうか。素子の死に夫人が関与しつつあるあいだに、物語はもっぱ
ら夫人や素子の影の射さない旅の空間を、妻とともにゆく勝呂の在り様に
眼を遣っていた。しかも帰ってきた彼が新聞をひろげると、「三日のあい
だ、日本は平和で、大きな出来事は一面にも社会面にも載っていないよう
だった」と、つけ加えている。だが、実際はそうではないことを物語は知
っていると考える読者はそこに、語りのうえで意識的な沈黙の操作がおこ
なわれているのを、ふたたび見いださずにはいられない。どうも物語は、
成瀬夫人を重視して、『スキャンダル』のドラマの〈蔭の演出者〉と位置
づけるべく、懸命につとめているように思われる。ちなみに、『スキャン
ダル』の成立に関する作者の「僕らしい小説家を主人公にしたミステリー
小説です。でもいわゆるミステリー（推理的）だけじゃなくて神秘小説」
という発言があるとのこと。⁽¹⁵⁾なるほど、推理小説仕立ての長篇という印象
を、わたしが抱くのに無理はあるまい。「神秘小説」の意味でのミステリー
の趣きは、勝呂の「贗者」が現われて彼に囁く講演会の場面や、あの約束
の金曜日、「贗者」にひきあわされる次第を伝えるVIII章後半に、求められ
よう。

文学賞の授賞式で自分の文学のために懇切明快なスピーチをして、
から半年を経ぬうちに世を去った加納の告別式で、彼の「友情を思いかえ
しながら」友人代表として、「故人の一生と文学とは、結局、一言で言え
ば、迎合しない文学であります」と、〈旅〉立つ友へ〈はなむけ〉の言葉
を贈った翌日、〈運命の日〉をむかえた勝呂はどうしたか。それを伝える
Ⅷ章後半が、「金曜日。／前夜、雪が降るかもしれないとテレビで告げて
いたが、いつもは適中しない天気予報なのに、底冷えがして妻の関節が痛
みそうな日だった」と語りだされている点に、まず注意したい。前章の重
よしへ赴いた日と同様、いきなり曜日を冒頭におく語り方で、しかも今度
は、一語一語一文一語ひとつのパラグラフ——のカタチをとるゆえに、「金曜
日」の一語はⅦの「水曜日」に増して際立ち、以下のその日のでき事が物
語のはこびに決定的な意味をもつ、との予想に、読者を導く。主人公のな
りゆきもそこに極まるのではなからうか。

「金曜日」の夕刻、指定された代々木のホテルを訪れた勝呂を、「カシ
ミヤのスイーターを着て、長椅子ながいすに体をななめにして腰をかけ」、煙草を
喫いながら、成瀬夫人が三〇八号室に「待っていた」という。ドラマの終
幕の準備万端を調べて、物語の表てに立った〈演出家〉の姿が、そこに在
る。主人公を舞台に迎え入れて、「きつと、いらっしやると思っていまし
たわ」と、確信に満ちた声をかける夫人は、この場面で〈演出家〉たるに
とどまらず、みずからも主役のひとりとして動くのだ。終幕の舞台となっ
た三〇八号室は、居間とベッドルームとバス・ルームに分かれていて、居

間の「クロゼット」には「覗き穴が隣りのベッド・ルームを見られるよう
に作って」あると、あとで夫人は説明する。そういう部屋を擁するこのホ
テル自体、秘密の快楽を満たすために造られた建物であって、「このホテ
ルの会員にも」との言葉もあるとおり、会員制のシステムを採る特殊なホ
テルにはかならない。したがってその一室を利用する夫人も、当然会員の
一人であるわけだ。いつからかは不明だが、部屋を使う手馴れた様子から
みて、いままでもときどきホテルを利用していたことがわかる。病院のヴ
ォランティアと特殊なホテルの会員と、くり返すが、どうにも折り合いの
つかぬ二つの人格の共存、そのことを自覚する成瀬夫人という存在は、
謎めいてわたしの眼をひく。

では彼のなりゆきは？……と読者の興味をかき立てる勝呂が、夫人の指
示で隣室の扉をあけて見たのは、森田ミツ、前に仕事場へ手伝いに来ても
らった女子中学生の、ベッドに熟睡する姿にほかならない。病人の介護に
働く少女と病院で出会った夫人がここに連れてきたわけだが、いったいな
ぜなのだろう？ むろんミツと勝呂とのかかわりを、夫人は知っていたと
いうことがある。だがそれだけではない。問題はミツの性格そのものに
在って、苦しむものに会うと手をさしのべずにはいられない優しさ、言葉
どおりの〈無邪気な〉在り様に注目したからこそ、おのれの演出するドラ
マに夫人は彼女をひきこんだのである。読者と同様、なぜミツをここにと
いぶかり、その理不尽さに感情の昂ぶりさえ覚える勝呂に、「挑戦的」な
姿勢を示す成瀬夫人の言い分を、聴こう——「相手が無邪気で善すぎるの
で逆に傷つけたくなるという心理だって誰でも持っていますもの」。

重ねて「イエスが殺された」ときの情況に及ぶ、次の言説も注意されて
いい——「群集はイエスが血まみれで十字架を背負って刑場に行く時、罵

ったり石を投げつけたでしょう。あれはいつも申しあげる快感のためだったとお思いになりませんか。無垢で清らかな人間が眼前で苦しんでいる。それを更に苛める快感があつた時、群衆のすべてを支配したと考えてはいけません？ イエスがあまりに無垢だったから、あまりに清らかだったから……わたくしたちが破壊したくなるほど……。そういう心理で誰にでもあるし、心の奥にかくれているんです……でも誰もがそれを覗きこみたくないんです、そして勝呂の小説はその残酷さに直面するのを避けてきたと、「大胆な眼」で彼をみつめていう。いわゆる《十字架の道行き》の場面に於いてのこの解釈は、イエスをさいなむ群衆の心理に、救われる《罪》ではなく、根源的な《悪》の衝動を見いだすもので、おなじ心理を夫人は自身に認めており、さらに勝呂にもそのひそむことを証するためにいま、無垢で無邪気な娘の身体をその前に横たえて、舞台装置をしっかりと調べたのである。続く「今日の金曜日は偶然です、すくなく、イエスが処刑された日ですわ。群衆がイエスを石を投げた日ですわ。だからわたくし先生を、わざとこのホテルにおよびましたんです……」（傍点引用者）とのセリフは、先に乗よして、次に会う日を決めた際に、それがたまたま、「イエスの死んだ日」とされる金曜日に当たるのに気づいて、その「縁起のわるい日」に勝呂をホテルに呼びだすことに興味を抱いた夫人の心情を、物語つていよう。十字架を負うイエスにかかわって、彼を「嘗試に遇はず」⁽¹⁶⁾ための条件を手に入れたわけだから。あとの傍点の語り「わざと」に、そうした《悪》の心理の動きを、わたしは見いだす。

なお、《道行き》についての夫人の言説をめぐって、気になることを、つけ加えておこう。四福音書のいずれにも、十字架を背にしてよろめくイエスに、群衆が罵声を浴びせたり、石を投げたりした記述はない⁽¹⁷⁾、という

のがそれだ。もっとも前後の総督官邸とゴルゴタの丘到着後の情況から、道中にも暴行を加えるものがいたとする想像は、容易に成り立つ。としても想像はやはり想像であつて、そこに成瀬夫人のオリジナリティが求められていい。とともにそういう特性を夫人に附与したのは、神ならぬ作者その人であることを思えば、「群衆はイエスが血まみれで十字架を背負って刑場に行く時、罵つたり石を投げつけたでしょう」以下の発言は、とりもなおさず遠藤周作自身が福音書のなかから引きだし、作家の想像力に基づく解釈を加えたところを、代弁するものにほかならない。それゆえわたしは、この成瀬夫人の発言にこそ、『スキヤンダル』成立の原点がひそむ、と思う。「無垢」で「清らか」な存在をまさにそのゆえに、瀆し、傷つけ、破壊しようとする《悪》を、福音書のなかに求めたと想ったトキ、宗教と文学のはざまに身を置くこの作家の『スキヤンダル』への第一歩が踏みだされたのではなかったか。

三〇八号室に眼を戻そう。「あの男」に会わせるといって、「私をだました」となじる勝呂に、「すぐお会いになれますわ」と平然と応じた成瀬夫人は、覗き穴からベッド・ルームを覗けば、「彼」と、「彼の」ミツにすることが見られるという。そして、彼は「先生が……あの少女に持っている感情をそのまま出す」だろう、「意識下」のそれを、とつけ加えられる言葉は、「静かに」、だからこそゆるぎない響きをもって、勝呂を打つ。読者はここに、一章の終わりに示された勝呂の「夢」を憶いだすべきだろう。洗面所の鏡にうつったパンティだけのミツの体、鏡に向かって「ニッと笑った」「感情的」な顔、「彼女は勝呂が扉のかけにかくれているのを知っていて、わざとそのような笑いかたをしたらしく、背後の彼に言った。／＼「奥さんが怒るもん」——というそれ。そこで眼の覚めた勝呂が日記に

「悪夢をみる」と記したこの情景こそ、彼の「意識下」にひそむ〈情念〉の逆投影ではなかったか。Iにはすでに「あの男」の影も、瞬時だが見えていたはずだ。そのことを思いかえせば、物語はことのはじまりから、クライマックスを、みずからのいたり着くべきところを、暗に標示していたのだと、読みとれよう。その裡なる〈情念〉と、汚れなき少女の身体の〈生け贄〉と、「あの男」の影とが、〈演出家〉兼俳優の手で用意されて、三月の〈十三日の金曜日〉に、あの「悪夢」の情景が夢でなく具体的なカタチにおいて、覗き穴の向こうに再現されようとしているのである。

舞台の凝縮した濃密な気配のなかで勝呂は、「混乱した感情」すなわち「ミツを連れ戻さねばならぬという気持」と「夫人がいう彼がこの少女に抱いている無意識のものを自分で確認したいという誘惑」とのあいだで、迷う。このとき「あの男」は「無意識」下の自分の形象化された〈分身〉であることを、勝呂が認めた点に注意したい。彼の迷いを見ました夫人は、「先生をもうひとつの世界におつれる業」といつて作ったカクテルをすすめて、部屋を出ていく。事態はそのあと、読者の誰もが予想しうるなりゆき、「誘惑」が理性を打ち負かすとのそれをたどって、クローゼットの覗き穴から眼をこらす勝呂の姿を示す。その眼のとらえた隣室の光景——「何時のまにか」衣服を脱がされ、ベッドに無心に眠るミツの白い身体。それを老醜のわが身と比べて、若い生命の息吹きを吸い込みたいという「衝動にかられる」、こちら側の勝呂。彼の感覚はこのとき、へみつめることをとおして、隣室に生きたのだ、とわいていい。だからこそ、続いてそこに姿を現わし、眼を覚ましたミツをふたたび深い眠りに導き、準備完了を告げるように「ちらっとこちらを見た」成瀬夫人を介して、勝呂の「あの男」との〈合体〉という超常的なでき事が成りたつのである。

「放心とも夢想ともつかぬ状態になっている間、いつの間にか夫人の姿は消え、別の背中がミツに覆いかぶさっている」と語られる情況、その「男」の一挙手一投足を、また「男」のミツの身体に看取し味わうすべてを、勝呂が自身のものと感じたのは、彼を離れて自由に働くこの感覚のなせる業にはかならない。その働きのよって「男」、「無意識」下の〈もう一人の自分〉に成った勝呂は、「ミツの体から生気を吸おう」と欲するとともに、眼前の若々しい身体に「嫉妬」を覚え、「嫉妬」は激情を呼び起こして、「思わず少女の頸に手をかけた」という。勝呂は殺人の寸前に立ちいたったわけだが、「その時、彼は自分のなかにさっきとは別の音をきいた」という。「さっき」の少女の腹部の奥にきこえた〈命の脈動〉ではない「音」とは、執拗に鳴る電話のベルの音で、それは「もうひとつのお前」「もうひとつのお前」「もうひとつのお前」と言いつづけていた。女と子供とを同じこめた小屋に火をかけたお前。十字架を背負う血まみれの瘦せこけた男に石を投げつけたお前。「先生、わたくしは自分を無気味に想います。無気味に感じます」と書いたお前」と告げられる事態は、何を示しているか。そういう「音」いや音声を「きいた」のだから、発信源は勝呂自身ではないわけであって、「その時」、「〈合体〉は解消し、彼はクローゼットに身をかがめている、いつもの、自分に戻ったのである。

「我にかえった」勝呂は、「今」自分を突き動かそうとした「衝動の渦」をかえりみて、「その強さから自分を救ったものは何か」と思う。彼だけではない。物語も読者もまたそれが気になるはずだ。「何か」はやがて明らかになるだろうが、さし当たってわたしは、金曜日のこの夜、「三月の中旬」だというのに、勝呂がホテルに着いたときから雪が降り続けていることに、注意しておきたい。「タクシーをおりた時、雪が頬をかすめてレ

インコートの腕にとまった。そして勝呂がしばらくホテルの前でためらいながら立っている間も、雪は彼の周りで烈しくふりつづけた」と、ホテルの入口で「勝呂はそのまま彼（*受付係）がこちらに気づくのを待って、更に強くふりだした雪の渦を眺めた」と、カクテルをすすめて夫人が「姿を消した」とき、勝呂が「顔をあげると外には静かに雪がふっていた」と語りはすでに三度、雪の在り様に触れている。季節外れのこの大雪はやはり「何か」とかわりをもつと思われるが、その検討はのちに譲って、さらに三〇八号室の情況に眼を留めると、勝呂と〈分離〉した「男」は、例の素子の描いた肖像画そのままの姿となつて、「うすら嗤い（わち）をうかべ」ながら覗き穴の視野から「姿を消した」という。二人の〈合体〉に楔（くさび）を打ち込んだものは「何か」が、ますます気になるところだが、いまひとつⅧの最後の段に、ベッド・ルームへ入ってミツに会つたとき、「勝呂は彼女の頬にも頸にも唾液（だえき）の跡がないのに気がついた。たしかに覗き穴から覗いた時には、拡大レンズのせいであくじの這った痕のように唾が光っていた筈だ」とある一節が、わたしの注意を促す。

すると、そのとき勝呂も一瞬疑つたように、「あれは幻影だったのか」。彼がみつめ、実感したのは、すべて「強烈な香り」のする「琥珀色の液体」のもたらした幻覚にすぎなかったのか。読み手のなかには、そのとおりだと受け留め、だから、『スキヤンダル』は成瀬夫人の術数にはまった主人公のひとり芝居を見せるだけの、底の浅い作にすぎぬと評する向きも、有るだろう。だが、覗き穴に吸い寄せられた〈眼〉の紡ぎだした情景が、いわゆる〈南柯の一夢〉にすぎないと知っていたら、物語はその一場の示す緊迫感を、如実に伝えることにつとめなかったに違いない。わたしはそこに、勝呂の、おのれの〈真実〉にもとづく確かな動きが存した、という感

触を抱く。「幻影」かと疑つたのは、勝呂であつて物語自体ではないことが、確認されていい。とともに、わたしもひとつの疑いをもつ。覗き穴の勝呂が、「男」と一体となつて自身に見いだした少女の裸身への凌辱は、実は成瀬夫人の演じた所作ではなかったか——というのがそれだ。

疑う根拠のひとつは、ミツを眠らせ、夫人が「ちらつとこちらを見た」ところにある語りの次の一節——「彼女は勝呂にこう宣言しているようでもあつた。「糸井素子とも、わたくしたちは同じことから始めたのよ」。

それは夫人の以後の動きのひそかな予告と受け留めることができる。あるいは、勝呂がそう感じたただけとしても、彼に、夫人は何をするかの予想がついたことは否めまい。ついで、事の終わるまで夫人はずつとその場に居合わせた、とみられること。勝呂が「覗き穴から見える異様な光景に茫然としていた」あいだに、「いつの間にか夫人の姿は消え、別の背中が」そこに在つた（傍点引用者）とあるけれども、それはかならずしも夫人の退室を意味しない。〈姿は消えた〉と〈姿を消した〉とは異なるはずだ。夫人にひきつけられた勝呂の感覚が、ミツの上にかがみ込む彼女の後姿に

「男の背中」を認めた次第を、語りは告げているとみられよう。さらに勝呂の聞いた電話の音がある。声となつて「もうひとつのお前」とくり返し言うそれが指摘するのは、すでにみたとおり、いずれも成瀬夫人の言説と所業であつて、だから声の呼び掛ける「お前」とは、勝呂のようでありながら、実は夫人自身なのではないか、と疑われてくるのである。とくに「先生、わたくしは自分を無気味に思います。無気味に感じます」と書いたお前（傍点引用者）の一行に接すると、その思いは強い。そういう声を発したのは、あるいは、勝呂にも夫人にも、そしてすべての善良な人間の心の闇にひそむ〈悪〉そのものなのかも知れない。

語りの示す以上の状況を踏まえて、わたしは、ベッド・ルームのミツの身体に実際に働きかけたのは成瀬夫人であった、と思う。夫人におのれの「分身」、左の肩甲骨の下に半月形の大きな傷跡、胸郭整形手術の名残りの「赤黒い線になって残っている」背中を見せた「男」の影を認めた覗き穴の勝呂が、彼女の動きをとおして、「男」と「合体」し、彼のなすことをおのれのものに見いだしたのだ、と一場のなりゆきを読み解く。作者のいう「神秘小説」の趣きを呈するこの場面が迫真性を帯びるのに、成瀬夫人もひと役買っているとみていい。ただそうすると、一連の行動のあげくミツの頸に手をかけたときに、夫人を押しとどめたものは「何か」が問題となるだろう。それは、殺しの衝動の「強さから自分を救った」と勝呂が感じた「何か」と、おなじものなのか異なるのか。その辺の検討も含めて、Ⅷの終段をみなければならぬ。

クローゼットから出て隣室へ移った勝呂の動きを伝える冒頭に、「彼女、成瀬夫人は「どこに行ったのか、あれつきり戻ってはこない」との一行がある。「あれ」とはいつを指すか定かではないが、「夫人の姿は消え」たときではなく、「彼」、勝呂の「分身」が「寝室から姿を消した」（傍点引用者）ときであるに違いない。そのあと、いちど眼を覚まして「まだだるいの……」というミツを眠らせた勝呂が、少女の健やかな寢息に、若さと老いの「対立」を「実感」したところで、またしても雪の有り様の触れられている点で、わたしの注意をひく——彼が「窓に近づいてカーテンをあけると窓わくに雪がつもり、部屋の光が降りつづいている無数の雪の舞いを照らした」とあるひと続きの語り。しかも今度は雪が、地上のではあっても「光」を呼び寄せていると見えて、興味深い。もともと、ゆり起こして身支度をさせたミツを連れ戻した勝呂がホテルの玄関を出たところには、「ヒマ

ラヤ杉から雪が落ちる」とだけあるけれども、それはこの場に雪とは無縁の光が、別にひらめくからだろう。

二人をとらえた一瞬の「閃光」は、勝呂をつけまわすルポ・ライターのカメラのフラッシュ、人間の悪意の放った光なのだが、「スキヤンダル」の現場をおさえた勝呂誇ったように脅しを掛けてくる小針の言葉を、「遠くで、かすかに鳴っている汽笛」のように聞きながら、タクシーでミツを帰してひとり道を歩く勝呂を追う語りは、また「雪が舞っている。雪は千駄ヶ谷にむかってただ夢中で歩いている彼の薄い髪や老いた顔をかすめては消え、ふれては溶けた。自動車のライトが光をあびせては泥と雪とをはねる音をたてて過ぎていく」と、状況を伝えている。降りかかる雪と車のライトの光をあびて「夢中に歩」く勝呂の想念は、ひたすら自身の「醜悪そのもの」に向かう。「あれは俺だ」という認識。それを抱える彼が、「醜悪のなかにも救いの徴を見つけないならない」と、「その真黒なものは平生は眠っているが、ある状況で不意に眼をさまし、動きはじめるのだ」との二つの思いのあいだに、混乱し迷うところに、注目したい。そこで、勝呂という人間とその文学とは、存在の瀬戸際に逢着しているのだから。この重大な局面は同時に、『スキヤンダル』そのものが、「悪」の文学となるか、否かの岐路に立つことを、意味しているはずだ。作者はそのいずれを選択したのだろうか？ 読者の問いに応じて、長篇は、「どうしていいのかわからない」勝呂が気違いじみた声でわめいた「その時」、眼にした光景に、答えを出す。

「踊る小人のように動きまわる雪を街灯の光が照らしている。突然、勝呂はその時、五十メートルほど先に誰かが同じように歩いているのに気がついた。背の恰好がどこかで見たように思える。一瞬たちどまった彼は、そ

れが自分の背の恰好だと知って、息をのんだ。あの男だった。／＼男はふりむきもせず、大通りをひたすら千駄ヶ谷の方に歩いている。街灯に照らされて無数の白いものが周りを動いている。その細かな雪片から深い光を発しているようだ。光は、愛と慈悲にみち、母親のような優しさで男を吸いこもうとしている。男の影は消えた（傍点引用者）——一節の差し出すのは、もちろん勝呂の想念が勝手に描きだした幻景ではない。「突然」とあるように、すでに前方にいたのに気づかなかった「あの男」の影に、自暴自棄になりかけた「その時」、気づいたのである。いや、彼の情態から推して、気づかせられたとみるべきだ、とわたしは思う。何ものかがそこに働き掛けて、この場面を物語のクライマックスたらしめている、と聞いていい。その〈何か〉は、先ほどホテルの一室で、ひとをしめ殺したいという〈悪〉の「衝動」から彼を「救ったもの」とおなじであるだろう。それは、終段の語りがはじめから気にかけていた雪、天から地上に舞いおりて部屋の、ライトの、街灯の光を呼び寄せ、いまはみずからも「深い光」を発して、〈道〉を行く勝呂の上に、「あの男」の上に降りしきる「無数の白いもの」であり、「細かな雪片」の宿した「光」そのものにほかならない。Ⅹ章の言葉でいえば「あの橙色の光」、「金色であるため、天界の果実とされ、完全、無限を表す」というオレンジの色をした、雪に示現する「光」の源は、天上の〈聖なるもの〉とみななければなるまい。

そのような光と雪は、十字架を負うイエスと群衆の場合とは逆に、「愛と慈悲にみち、母親のような優しさで」男を吸収し、「勝呂自身をも包みはじめた」という。〈聖なるもの〉は、「男の影像」すなわち〈悪〉の形象を溶解して、残された勝呂の「顔にふれ、頬をなで、肩に溶けて」いく。そこで彼は〈浄化〉を施されたのであって、やはりⅩ章の言葉にしたがえ

ば「言いようのない安らぎ」を恵まれたのである。おのずから口を衝いてるポードレルの詩句、ほかならぬ勝呂自身の《老いの祈り》⁽¹⁹⁾でもある「憐れみたまえ」「心狂える人間を憐れみたまえ」「なぜ人間が生き、なぜ人間が作られたか、知りたまえるあなたの眼に……人間は怪物とうつるのですか」⁽²⁰⁾で締め括られるⅧ章に、『スキャンダル』はいかなる作かについて作者の示した答えは、わたしには明らかだ。この長篇は〈悪〉の文字ではないこと、勝呂の希うように「醜悪のなかにも救いの徴を見つけなければならぬ」作品であること。そういう物語として、遠藤周作は『スキャンダル』を世に問うたのである。〈罪ではない悪〉を問おうとしながら、ついに「救いの徴」と主人公の「主」への呼び掛けに到達してしまうところに、その作家としての限界が求められるのかもしれない。しかしまた、だからこそ彼はキリスト者である作家なのだ、と受けとめてよいのではなからうか。したがって、勝呂もまた、次の長篇『スキャンダルあるいは老いの祈り』にしっかりと取り組むことができるに違いない。

7 物語の〈結末〉

最終章Ⅹに即して、言うべきことがらはさしてない。「二日前まではまだ日蔭に残っていた穢れた雪が昨日と今日との晴天ですっかり消えた」というから、三月の一七日にはじまって、「復活祭のあとの日曜日」にいたるトキの経過のなかで、夢に、おのれの〈再生〉、子宮の闇から外界の光のなかへ押し出されようとする情景をみた勝呂は、雪の夜の「二週間」後つまり三月の二七日に、栗本のつとめる出版社の社長に会って、例の写真とネガを小針から買い取り、「焼却」したことを聞く。だからといって

それで裡なるいまわしい記憶が灰となつてただちに消えたわけではない。「これで一応は落着いたと思います」と社長が言つても、「御心配なく」と編集局長が囁いても、それで「救われたという気持」にはなれない。勝呂が自己のすべてを取り戻すには、やはり多少の時を必要とするようだが、以後のなりゆきについては、すべてを、彼と「主」のはからいとに委ねることにして、わたしはこの場に、小針のごとき俗悪は世間の良識によつて然るべく処置されるというプロセスを、認めておきたい。

そこで問題はいまひとりの人物のうえに移る。勝呂と同様、裡に「怪物」を抱えた成瀬夫人は、どうなつたか。Ⅹ章に彼女の姿はまったく見られない。ただ、そのはじめの日に妻が「ずっと病院にいらっしやらないわ」と、おわりの日に病院の婦長が「それが近頃、ちつともいらっしやいませんかよ」（以上の傍点ともに引用者）と、勝呂に告げているばかりなのだ。物語のはこびに即していえば、雪の夜を境にして、かわりのあつた誰にも、夫人の消息はわからない、ということになる。しかし、その「金曜日」三月一三日の夜勝呂の視界から「姿は消え」たあとの夫人の動きを、すでに「観た」わたしには、さらに千駄ヶ谷の方にあるいていく「男」とともに在る彼女の姿が、あらためて観えてくる。そのとき雪と「深い光」に包まれて、そのなかに吸いこまれ、「男の映像」が消えたのとおなじく、夫人——少なくとも「激情」に駆られて少女の頸に手をかける、へもう一人の彼女—is、示現するへ聖なるものへの愛憐に包まれ溶解されたのではなかつたか。光の示す「愛と慈悲」「母親のような優しさ」はすでに、ポランティアとして茂少年ほかの病児たちのそばに在る成瀬夫人のものでもあつたはずだ。やはり存在のぎりぎりの局面において、「深い光」は夫人の恵まれた母性を強め豊かにして、裡なる「怪物」の衝動の激しさから身を守

ることを、可能にしたに違いない。病院にこのところ「ずっと」姿を見せないのは、彼女もまた、ひとり静かに自己回復の《成し遂げられる》⁽²¹⁾トキを待つ必要があつたからだ、と思われる。

『スキヤンダル』の最終の日、それは先の「水曜日」「金曜日」と同様、「日曜日」／復活祭のあとの日曜日なので教会はいつもより人が多い。そのカタチで提示されている。この日も勝呂の人生に意味をもつ一日なのであろう。教会で十字架のイエス像を仰ぎながら、ゴルゴタに向かう「その人」を苛めた「群集のこと」を想う勝呂について、「彼があの時、その場に立っていたなら、その人に石を投げ、苦しむ姿をみて快感を感じなかつたとは絶対に言えないのだ」と、語りはいう。主人公に即しながら、しかも対象化したもの言いのなされるのは、教会の勝呂が「群衆」の一人となりうる自分を、きつちりと見据えている証據であらう。午後仕事場にゆき、代々木公園に出てミツを探したが、見えないので、病院を訪ねてみた彼は、婦長から成瀬夫人の消息を聞き、「待合室の椅子に腰をかけて、この四階で夫人が愛情をこめて、子供たちのリハビリを助け、子供たちに童話を語っている姿を思いうかべた」（傍点引用者）という。傍点の語りに、物語の終局に身をおく主人公の心の在り様が、おのずから読者に思い浮かぶ。その夜の情景——

彼は、ベッド・ランプを消した。

真夜中、遠くで鳴る電話の音で眼がさめた。執拗に鳴っている。彼を呼んでいる。目をさまして妻も聞いている……。

世に《悪》の声はなおやまないようにみえる。にもかかわらず勝呂も妻も、

もはや平静にそれを聞くだけなのだ。放っておけばそのうちに、声も疲れて止むだろう。

こうして、『スキヤンダル』はみずから語り終え、口をつぐむのである。

[注]

(1) 本論における『スキヤンダル』のテキストは、『遠藤周作文学全集4』（新潮社 一九九九・八）所収のそれを使用した。

(2) 作者の作品史における『沈黙』『死海のほとり』『侍』が、それぞれ意識されているだろう。三作の執筆期間は十五年ちかくと作者の方が長いけれども、「男」の背中の手術の痕跡などともに、「今度は自分の中のもうひとつの自分を探す小説を書いてみたいと思いました」との作者の発言（対談『スキヤンダル』の読み方教えます）——『知識』一九八六・七の趣旨に添った作中の事象のひとつ。なお対談の引用は、(1)の全集本の「解題」（山根道公）の指摘するところにしたがった。

(3) F・シュタンツェル／前田彰一訳『物語の構造——〈語り〉の理論とテキスト分析』（岩波書店、一九八九・四 第二刷）の用語。「物語状況」を具体的に提示する役割を担う人物の一人。「映し手というのは、考えたり、感じたり、知覚したりするが、語り手のように読者に向かってしゃべったりしない作中人物のこと」で、「この場合読者は、映し手たる作中人物の眼でもって物語の他の人物たちを眺める。語り手によって「物語られる」わけではないから、この場合は描写の直接性の印象が生まれる」（八ページ）と、説明されている。

(4) IV章の成瀬夫人の手紙のはじめに、母が遠縁の成瀬俊夫を信濃町の学生寮

に訪ねて、「万里子の勉強をみてやってくれない」（傍点引用者）と頼んだことが記されている。

(5) 注(2)の「解題」を参照した。

(6) 引用は新潮文庫版『留学』（二九六八・九 初版）に據った。

(7) 『新潮』一九八三（昭58）年一〇月〜一九八四年（昭59）年一月連載、初出時の題は「宗教と文学の谷間で」。一九八五（昭60）年七月新潮社より刊行、その際『私の愛した小説』と改題された。引用は新潮文庫版（一九六三・九）に據った。

(8) 『私の愛した小説』ならびに『スキヤンダル』に即して、遠藤周作における〈無意識〉の問題への照明を試みた論考に、金恩暎「遠藤周作論——私の愛した小説」での「無意識」のアプローチを中心に——（『キリスト教文学研究』二二号、二〇〇四・五、日本キリスト教文学会）がある。

(9) 『私の愛した小説』を参照した。

(10) 『新潮 現代国語辞典』の〈スキヤンダル〉の項。

(11) 注(2)に記した『沈黙』から『侍』にいたる遠藤周作の歳月が、傍点の「この十五年間」に意識されているともみられよう。

(12) 語り手の確認というカタチをとるこの一行は、その伝える思いが本人の意識をこえて動くさまを、表わしている。

(13) 『スキヤンダル』初版（新潮社、一九八六・三）では、この個所が「先生にも」となっており、注(1)の全集本で「先生も」と訂正された。

(14) 外海町（長崎県西彼杵郡。遠藤周作文学館、ド・ロ神父記念館、歴史民俗資料館の所在地）には、黒崎・出津・大野の三教会があるが、勝呂夫婦の訪れた「教会」には黒崎教会のイメージが托されているだろう。なおド・ロ神父の事蹟を記した森禮子『神父ド・ロの冒険』（教文館、二〇〇三・三

初版)を読むと、外海の情況がよくわかる。

(15) 矢代静一との対談「『スキヤンダル』の構造——人間の多重性について」

『新潮』一九八六・四の一節。注(2)の「解題」の指摘するところにしたがった。

(16) 「マタイ傳」第六章十三節にある《主の祈り》の一句、《我らを嘗試に遇せず》の表現を借りた。『舊新約聖書』(米國聖書協會、一九一四・一 初版)を参照した。

(17) 四福音書の《道行き》の個所に眼を留めておく。「マタイ傳」には、《總督の兵卒ども》が《かく嘲弄してのち、上衣を剝ぎ、故の衣をきせ、十字架につけんとて曳きゆく。その出づる時、シモンといふクレネ人にあひしかば、強ひて之にイエスの十字架をおはしむ。斯てゴルゴタといふ處、即ち髑髏の地にいたり、苦味を混ぜたる葡萄酒を飲ませんとしたるに、嘗めて、飲まんとし給はず。》(27・31〜34)と、「マルコ傳」には、《兵卒ども》が《かく嘲弄してのち、紫色の衣を剝ぎ、故の衣を着せ十字架につけんとて曳き出せり。時にアレキサンデルとルポスとの父シモンといふクレネ人、田舎より來りて通りかかりしに、強ひてイエスの十字架を負はせ、イエスをゴルゴタ、釋けば髑髏といふ處に連れ往けり。》(15・20〜22)と、「ルカ傳」には、《人々イエスを曳きゆく時、シモンといふクレネ人の田舎より來るを執へ、十字架を負はせてイエスの後に從はしむ。民の大なる群と歎き悲める女たちの群と之に從ふ。イエス振反りて女たちに言ひ給ふ『エルサレムの娘よ、わが爲に泣くな、ただ己がため、己が子のために泣け。視よ』「石婦・兒産まぬ腹・飲ませぬ乳は幸福なり」と言ふ日きたらん。その時ひとびと「山に向ひて我ら上に倒れよ、岡に向ひて我らを掩へ」と言ひ出でん。もし青樹に斯く爲さば、枯樹は如何にせられん』また他に二人の惡

人をも、死罪に行はんとてイエスと共に曳きゆく。髑髏といふ處に到りて、イエスを十字架につけ、また惡人の一人をその右、一人をその左に十字架につく。》(23・26〜33)と、「ヨハネ傳」には、《爰にピラト、イエスを十字架に釘くるために彼ら(※祭司長ら)に付せり。彼らイエスを受取りたれば、イエス己に十字架を負ひて髑髏(ヘブル語にてゴルゴタ)といふ處に出でゆき給ふ。其處にて彼らイエスを十字架につく。》(19・16〜18)とある。内容に違いはあつても、暴行に及ぶ「群集」の姿はどれにもみられない。引用は注(16)の聖書に據った。

(18) アト・ド・フリース著／山下主一郎他訳『イメージ・シンボル事典』(大修館、一九八四・三)の「orange オレンジ」の項。

(19) Ⅷ章の五節で、勝呂が栗本に告げる「次の長篇」の題名『スキヤンダル、あるいは老いの祈り』を参照した。

(20) 勝呂の思はずも口ずさむ「うる憶えのボードレールの詩」は、『巴里の憂鬱四七』のそれ。『私の愛した小説』Ⅸの「コーランを読む」を読みながらの章に、遠藤周作は、「テレーズ・デスケル」を読み終る度毎にエビグラフとして掲げられたこの詩が「実感をもつて心に蘇ってくる」と記し、「主よ、あわれみたまえ、ねがわくば、我らのこの狂える心に。……なにゆえに我らは生き、なにゆえに我らは創られしか。そしてこの我らが作られしその深き意味を知り給える、唯一なる主の御眼にまで、この我らは怪物としてうつるのでありましょうか」と訳出して、次のようなコメントをつけ加えている——「狂える心。それは私の無意識にひそむもう一人の私(影)のことである。だがその狂える、罪の母胎の影だからこそ、吹けば飛ぶようなあの社会道徳などではとてもとても充たされぬのだ。影——無意識の元型は、もつと深いXを求めている。／そのXをいつからか私は私

のイエスとよぶようになった」(傍点引用者)。勝呂に現われた「男の影像」も、実はコメントの示す「影」にはかならず、それゆえに雪の夜道を往き、「光」に吸いこまれ、そして勝呂の魂がボードレールの詩句を呼び求めたのではなからうか。なおⅥ章のなかほどで、仕事場の勝呂に「なぜか」ふいに思い浮かぶ「リヤ王の台詞」(テキスト一八ページ上)も、作者のものであることを、『私の愛した小説』の最後の一節が告げている――、

この頃、路を歩いている時、ふとシェイクスピアの「リヤ王」の、あの祈りにも似た台詞がよみがえることがある。その台詞は私の心のなかでは次のように翻訳されているのだ。

どうか、なぶらないでくれ

わしは愚かな愚かな年寄りにすぎぬ

すでに六十の坂をこえた。かけ値なしにだ……

そっとしておいて欲しい――その願いも遠藤周作と勝呂との《老いの祈り》にこめられているのであろう。

(21) 「ヨハネによる福音書」第十九章三〇節のイエスの言葉《成し遂げられた》を参照した。引用は『聖書新共同訳』(日本聖書協会、一九八七)に據った。

(えんどう たすく 本学元教授)